

1. 生涯学習教育研究センターは30周年を迎えました

<生涯学習教育研究センター30年のあゆみ>

本年4月、生涯学習教育研究センターは、その前身である大学教育開放センター誕生から数えて満30歳となりました。昭和53(1978)年4月、大学開放を専門的に扱うセンターとしては全国の国立大学の中で3番目に設立されたセンターです。当時の新聞記事からは、地域社会から大きな期待を集めつつ誕生したことが伺えます。ちなみに、故・福田赳夫氏が内閣総理大臣を務めていた頃のことです。

平成3(1991)年には名称を生涯学習教育研究センターと変更し、平成12(2000)年には経済学部構内から研究交流棟6階へと移転しました。

現在、30年間に実施された全ての公開講座等のデータを含む『香川大学生涯学習教育研究センター30年のあゆみ』を編纂しているところです。

<大正時代から実施している公開講座>

ところで、本学の公開講座はいつ頃始まったか、ご存知ですか？

公開講座それ自体は、当センターが誕生した30年前に始まったものではありません。各学部(当時は教育学部、経済学部、農学部)でそれぞれ実施していた公開講座(当時は開放講座)を、より一層拡充することを目的に当センターが誕生したのであって、30年以上前から地域住民向けに講座は行われていました。

では、本学が正規の学生以外に講座を行うようになったのは一体いつ頃からでしょうか？今回、『30年のあゆみ』編纂にあたって、本学における公開講座の歴史を調べてみたところ、なんと、大正14(1925)年7月にまで遡ることができることが判明したのです！もちろん、当時は香川大学ではなく、経済学部・法学部の前身である高松高等商業学校の時代。高松高商の授業開始が大正13(1924)年4月ですから、学校の設立ほどなくして対外的な事業も開始されたということです。(左は昭和4年のチラシ。戦前は「成人教育講座」という名称で実施されていました。)

更に驚いたのは、高松高商は、東京帝国大学(現・東京大学)や小樽高等商業学校(現・小樽商科大学)に匹敵するほどの規模で開放事業を行っていた高等教育機関だということです。今でこそ公開講座は全国各地で行われていますが、戦前においては稀有な事例であり、誇るべきことと思われれます。戦後、昭和24(1949)年に新制香川大学が発足しますが、その年の9月には経済学部が早々に「専門講座」を実施しています。そして、その後徐々に他学部にも広がっていったという次第です。

本学の生涯学習教育研究センターが、全国的に見ても最も初期の頃に設立されたのも、歴史を振り返ってみると至極当然のことと言えるのではないのでしょうか。

公開講座のような開放事業は、教育・研究に次ぐ「第3の機能」と言われることが多く、大学教職員にとっては比較的新しい職務と考えられがちですが、本学では実は設立当初から実施されてきた伝統があることを忘れてはならないと思います。

<30周年記念講演会・シンポジウムのお知らせ>

さて、2008年9月25日(木)には、高松市生涯学習センターまなびCAN多目的ホールにて、30周年記念講演会・シンポジウムも開催されます。詳細は以下の通りです。多くの方のご参加をお待ちしております。

香川大学生涯学習教育研究センター30周年記念講演会 & シンポジウム 知の循環型社会の構築に向けた香川大学の取り組み ～生涯学習を通じた社会貢献～

日時:2008年9月25日(木) 13:30-16:00

会場:高松市生涯学習センターまなびCAN

定員:200名(無料、但しセンターへ事前申し込み)

後援:香川県教育委員会、高松市教育委員会

記念講演「シェイクスピアとともに歩む」(香川大学名誉教授・稲富健一郎) 他



2. 参加型学習への誘い～センター担当教員の研究・実践紹介(6)～

②対象に合わせた参加型学習の用い方

参加型学習は対象によって異なった表情を示します。自然・社会・生活体験のいずれも少ない若者は、周辺世界の理解の仕方が私たちとは異なっています。若者の周りにも大人と同じ情報が飛び交っていますが、そこにはコンテキスト(文脈)が欠ける場合が多いようです。直接体験をとまなわれない知識は薄っぺらいものであって、五感で感じたような統合的な認識ではありません。それに対して、直接体験をとまなう知識は、色や形、臭い、温度、周囲の環境、光、音、感触等さまざまな情報と結びついて獲得されています。この結びつきがコンテキストであって、知識の背後にあるコンテキストが、豊かな想像性や創造性を育むことにつながりますし、言語の内面化や定着に結実します。

また学校等では多くの場合、学ぶ側(生徒・学生)に、教える側(教師)の目指すゴールを見せずに教育活動が展開され、学ぶ側がそれに気づいていくようあらゆる手段を駆使するところに特徴があります。逆に、学ぶ側にゴールや見通しを先に説明しても、経験のない彼らは言葉を理解したとしても、意味のまとまりとしては伝わりません。ゴール地点に到達した後に、プロセスを振り返ることでしかゴールの意味がわからないのです。体験を取り巻く環境が様変わりした中で、今必要とされている体験は直接体験です。学習支援方法も経験を体系化するに相応しい方法論を開発し、できるだけ本物に触れる学習機会の提供や学習情報提供を行っていく必要があるようです。



それに対し、学習者がさまざまな体験を豊富にもつ成人である場合、あらかじめセッションのゴールイメージを伝えておく方が有効のようです。貴重な時間を割いて学習に参加しているわけですから、学習の意義や見通しを理解している方が学習に身が入ります。ゴールイメージを伝えることは一見教育的でないように感じられるかも知れませんが、成人学習者は学習成果が必ずしも課題解決に即応するわけではないことも知っています。学習プロセスでの気づきや関係づくりの方が結果的に有効であることも体験的に理解しています。成人学習者を信頼するということが参加型学習を行うときに大切なようです。

— * — * — * —

さて、参加型学習について2007年3月より本欄でご紹介してきましたが、9月4日(木)13:30-15:00には大学教育開発センター主催FDスキルアップ講座で「授業実践へのワークショップの効果的な活用法」を行うことになりました。ご関心のある方は是非ご参加頂きたいです。(文責:清國祐二)

3. ホームページがリニューアルしました

本年4月にセンターのホームページがリニューアルしました。リニューアルに伴い、今年度の実験的試みとして、音声による公開講座の紹介番組「今湧き上がる知の泉」を月一回のペースで更新しています。公開講座の実施教員とセンター担当教員・山本との対談形式で、それぞれの公開講座の趣旨や具体的内容を紹介しています。

トップページからお聴きになれますので、ぜひお聴き下さい。

<今湧き上がる知の泉>

- 第1回 当センター長・清國祐二 「センター長挨拶」(10分)
- 第2回 名誉教授・稲富健一郎 「シェイクスピア講座の魅力」(前編:7分、後編:11分半)
- 第3回 農学部准教授・安井行雄 「昆虫を通して環境変化を知る」(10分)
- 第4回 教育学部教授・野崎武司 「ボール運動は子どもの心と体を鍛える」(8分半)・・・以上公開済
- 第5回 工学部教授・岡野真 「神社、それは研究者に残された宝の山」(10分)・・・8月中旬公開(以後、来年3月まで月一回更新予定)

今年度の公開講座	トピックス
ニュースレター	2008年7月18日
受講手続き等について	7月23日(水)～7月25日(金)10:00-11:30の「毛ノ尾方一研究(はしめの第一巻)」はおかげさまで満員となりましたが、同日午後にも追加開催することになりました。詳細内容はこちらで、7月23日(水)24日(木)は13:30-15:00、7月25日(金)は15:00-16:30です。
センター紹介	
活動報告	

センター雑感

本文にも書きましたとおり、ここ数ヶ月間、当センター30年分のデータと格闘していました。公開講座のアルバム写真だけでも膨大な量です。その中から写真を厳選するのも一仕事! もっとも、それだけ当センターが多くの受講生そして教職員の方々に支えられてきたことの証です。そして、今回の作業によって、本学における公開講座の歴史が予想以上に長いことも知ることができました。この伝統を次の10年、20年に繋げていくことが今後の課題です。(山本)

バックナンバーは下記のWebサイトに掲載されています。是非ご覧下さい。

Tel. 087-832-1273 Fax. 087-832-1275 URL. <http://www.kagawa-u.ac.jp/lifelong/> Email. syogse@ao.kagawa-u.ac.jp